

3 学系

哲学・思想学系

教員数	教員等数 (人)	教 授 9 (11)	助 教 授 7 (6)	講 師 3 (2)	助 手 3 (5)	技 官〔準研〕 1 (2)	
	異動状況 (人)	退職・転出 5 (4)	昇 任 - (1)	採 用	学 内	2 (3)	1 (-)
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数			学会発表数		
		国 内	国 外	国 内	国 外		
		50 (57)	2 (5)	13 (19)	2 (4)		
	受賞数	(件)					
	研究費等		採 択 件 数	採 択 率 (%)	金 額 (千円)		
		科学研究費	2 (4)	18 (27)	4,400 (5,600)		
		学内プロ	6 (6)	66 (50)	3,200 (3,250)		
奨学寄附金件数・金額			件	千円	(件	千円)	
受託研究件数・金額			件	千円	(件	千円)	
	受 託 研 究 員	人 (人)					
施設・設備							

・ () は前年度の数値を示す。

1 哲学・思想学系の活動

本学系の研究教育活動は、哲学、倫理学、宗教・比較思想学の各分野及び全体わたって本年度も向上的に遂行された。研究論文、著書の公刊数および発表数は、専任教官（教授2名）の転出もあり総数として若干減少したが、個々の研究活動の内実は従来以上の水準を維持した。また本学系教官による日本道教学会事務局の活動、「宗教と社会」学会事務局の受け入れなど活発に行われた。学会以外での社会的活動（企業倫理、宗教文化に関する講演等）も積極的に遂行された。人事面においては欠員補充についての審議が着実に進められ、昇任人事も順調に行われた。科学研究費補助金については、申請数が増大している反面で、採択者数が減少したことは今後の研究体制のあり方を含めて課題となる。本年度は申請に当たって学系・専攻の教官によるプロジェクト研究の申請が果たされ、それが今後の研究体制に一つの方向性を示し得たことは極めて意義あることであった。学内プロジェクトについては、前年度の採択件数の水準を維持することができた。学内・外の研究資金獲得の数値の拡大のためにも、人事面を含めて、研究領域の拡大と深化の方法を模索していく必要がある。

2 自己評価と課題

研究の一層の向上を図ること、それに伴う人事面での充実化を果たしていくことが当面の課題である。新研究科が定着してきた現状に照らして研究教育の充実化を図り、本学系に固有の研究特徴を基盤としながら、視野の広い研究者の採用方向を創出していく必要がある。個別研究と持続的な研究協力体制（プロジェクト・チームなど）の有機的連関の確立という課題は、一方で文系の基礎的学としての本学系の役割を果たしつつ、現代社会の提起しているテーマにも応答しうるような研究体制の道を切り開くことであろう。そうした研究方向へのシフトこそが、今後予想される法人化における研究組織の再編化にも直結した、また社会的活動への参画をも含めた種々の研究体制の変革として期待されているからである。そのためにも若手研究者の積極的な参加、学内・外の研究資金の導入、社会的・国際的研究貢献など積極的に遂行していく必要がある。